

2015年6月28日 礼拝メッセージ

主題：どんな報いにもまさるもの

聖書箇所：黙示録4章

序論：

学生時代、そこそこスポーツに熱中しました。たいした成績ではありませんでしたが、ときどき表彰状をもらいました。賞状をもらったり、盾をもらったりするのはなかなか誇らしいものでした。みなさんはどうでしょうか。スポーツだけではなく、勉強、芸術、職場、さまざまな評価をされてきたと思います。ただ、この世の中でどんな評価をされてきたとしてもすべては過去の栄光になってしまいます。皆さんは釜本邦茂というサッカー選手をご存知ですか、私の時代にはスーパースターでしたが、ご存じない人も多いです。私たちの仕事もたとえ優秀であっても、いつかは忘れられてしまいます。

主はすばらしい報いを与えられる

しかし、私たちの報いは天に用意されています。今日の箇所に出てくる24人の長老たちは金の冠を与えられて主の前に行きます。私たちへの報いはどうでしょうか。金の冠かどうかはわかりませんが、決してつまらないものではないはずです。私は期待しています。自分はたいしたことはしていませんが、主は気前のよい方なので私たちの少しばかりの信仰を大きく大きく評価し、恵み深く報いてくださるはずです。なんと感謝なことでしょうか。またここには水晶の泉や宝石が出てきます。これも私たちへの主の報いかもしれません。私たちをそのように輝くものと主はしてくださるのです。

報いが色あせるとき

天国行きたいなあ、主の報いをもらいたいなあ、と思う。その生き方はすばらしいと思います。天国に期待し、天国を自分のゴールと定め、生きることにははかりしれない特権が伴います。この地上で絶望しなくてよいし、恐れすぎずにすむ、そして、本来罪のさばきを受けるはずの主の御前で赦されるばかりか、表彰してもらえる。ここに出てくる長老たちもそんな気持ちだったのではないのでしょうか。しかし！その彼らが天の光景を見て、神の前に進み出たとき、何がどうなったのか！冠を投げ捨ててしまっている。私たちの主にある人生も地上での業績も、いざ主の前に出てみれば、完全に色あせてしまうのではないのでしょうか。何に対して？主イエスの愛と義のすばらしさにです。そしておそらくイエス様の手は空っぽなのです。どういうことか。私たちには報いがある。けれども主イエスはそこで何も持っているようには見えないのではないか、ということです。わたしたちよりももっと父なる神に仕えたのに、です。

主の報いはいか

さてここから先はわたしの妄想、いや洞察です。「主よ、あなたには何の報いがあるのです

か。」と私たちが聞きます。「冠は？黄金は？大帝国は？宝石は？???」わたしたちは問いかけます。主は黙って微笑まれると思います。なにせ無口ですから、子羊ですから。主はこちらに釘の後のある手を差し出します。そしてこう言うのです。「あなたが私の報いです。」私たち、「……!？」

そりゃあ、冠を投げ出したくなるってもんです!!!この最高の主のことば、これこそ私たちの報いと言ってもいいのではないのでしょうか。

結論：

高校時代に倫理社会の川島という先生に、声をかけられました。当時、骨折入院明けで新学年、新しいクラスで非常に緊張していた私に、彼がちょっとした励ましの言葉をかけてくれたのです。それが今も強く残っています。

もし主が、「あなたこそ、私の喜び、私の報いだ。」と言ってくださっているとしたら、それ以上の愛情表現があるでしょうか。そのような主の愛に少しでもこたえたい。そんな気持ちにさせられます。みなで目標を持ち、ビジョンを持ち、人生を良くしていく。そんな生き方もよい。でも、「主の愛」というエッセンスこそが福音の神髄、喜びの源泉となり、私たちを導いてくれるのです。